

私たちは難民だった！

神奈川県 横田 千露

三河という名前の由来にもなった河の一本、矢作川は秋から冬にかけては強い風が、荒涼としたススキの原を走り抜ける。小高い堤防に立つと、小さな集落が点々として見えた。今は休耕田が目立つ。大雨で堤防が切れれば、ひとたまりもない場所に父の生家はあった。茅葺き屋根、田の字の間取り、二間幅の土間は夜なべの場所、草鞋わじ、蓆むしろなどを作っていた。明治三十一（一八九八）年に、父はこの家の三男として、二月の梅の花の時期に誕生し、名前を梅吉とつけられた。しかし、梅吉の母は四男を出産した直後に病死してしまい、一年後に迎えられた新しい母親と、幼・少年期を過ごすことになる。当時、尋常小学校は四年生で卒業した。貧しい家の子は、十歳以上は労働力であった。

父はすぐに、大工の小僧として弟子入りした。親方の言ったとおりにはやれないと、口より先に「のみ」がはしと飛んできて、後ろの材木にかつと音を立てて食い込むほどだったそうである。休みは毎月一日と十五日、そのときもらうささやかな小遣いを貯めて、カンナなどを一丁ずつ買うのが楽しみだったと話していたことがあった。

年期奉公が済むと、一人前の大工として扱われたが、一年間の御礼奉公をしなければならず、それが明けると国民の義務として徴兵検査を受けることになっていた。父は徴兵検査は甲種合格であった。世間は米騒動が起きるほどの不景気で、大工としての腕を振るう仕事は無かったという。

大正十二（一九二三）年関東大震災が発生し、新婚早々の父は横浜に動員され、母を連れて本牧町に移り住み、たくさんのバラック小屋を建てたという。後に年取った母は、当時は振り返り「馬車道から本牧までよく歩いたよ」と懐かしがっていた。

父は、二十九歳のときに召集されて、出征兵士として青島に行くことになった。職人さんも見習いの小僧さんも、

建築中の建物ごと先輩の親方に委託しての出征であった。要領の悪い二等兵の父は、「セミの真似をして、柱にしがみつきミンミンと鳴く罰を受けたことがあった」と笑っていた。

昭和三（一九二八）年六月、張作霖の乗った列車が爆破され死亡するという濟南事件が起こったが、父はまだ青島に駐留していた。

昭和五年、ロンドン海軍軍縮会議で条約調印後にやっと召集解除になって帰って来たが、当時日本国内は金融大恐慌の最中で、農村では娘を売った金で税金を払う有様であった。ウォール街の株も大暴落、世界中が不景気になっていて、父は仕事が無く、少しばかりの修繕仕事の手間賃も支払ってもらえなかった。

昭和八年、私が生まれることにより、父は今の生活を何とかしなくてはと、切実に思うようになった。「柳条溝事件」以後、関東軍は半年の間で中国北東部のあらましを平定した。溥儀を皇帝とした満州国を建国した。そして、その満州国を関東軍が操り、「王道楽土」とか「五族協和」などをスローガンに掲げて、日本国民をあおっていた。

そして国内の不況から、満州に行けば仕事もあり、良いことが待っているイメージを植え付けていた。開拓や建設の夢が、多くの人々を引き付けた。

父も国策の宣伝にのって、満州での建築の仕事を求めて、一歳足らずの私を連れて家族三人で満州へ渡った。しかしその実情は、国の宣伝どおりにはいかなかった。満州では十一月には結氷し、コンクリートも土壁も塗ったあと凍って、四月に気温が上がるとはぼろりと全部落ちてしまう。十月から翌年四月までは仕事にならない。

私は雪が降ると父の膝の中で、働きに出た母の帰りを待つのであった。暮らし向きがよほど悪かったのか、物心ついて覚えていただけで五回も引越した。駄菓子屋の二階での間借りであった。チョコレート売れ残りをもらって、一度にたくさん食べて黒いウンチが出て、父と二人で母に叱られた。

次は新京駅近くの二階の間、線路の上に陸橋があり、列車が通るとき足の下から白い煙が吹き上がり、その合間から走りすぎる黒い機関車が見える。これが気に入って、よく陸橋に行った。これも母にひどく叱られた。

次の所は、風呂場に電灯が無く真暗で、怖くていつも泣いていた。

うどん屋の二階を借りていたとき、朝からすごいどなり声が出た、下のうどん屋が夜逃げしたため、借金取りがいっぱい集まっていた。私たちもすぐに引越した。

間借りしていた食堂のスッポンが十匹ほど籠から逃げ出し、一晩中スッポン探して眠れなかった。しかし、それが縁で父はその食堂で働くことになり、やっとまともな仕事に就くことができた。

この引越しに次ぐ引越しは、満州にまで来て、いかに仕事が無かったかを物語っている。父は戦争に負けるまで、中国人のホーさんと食堂を続けた。仕事の忙しい父は、私と遊んでくれることはなかった。私は「遊んで！」と駄々をこね、母を困らせた。そんなとき、ホーさんが私の手を引いて連れ出し、中国語の映画を見せたり、京劇を見せたりしてくれました。そのとき、ホーさんの彼女がいつも一緒だった。いつか、三人で公園でボートに乗っていた。休暇らしい兵隊たちもボートに乗っていて、大声で何か笑いながら私たちにぶつかってきた。あっちからもこっちからも、私

たちを取り囲むようにしてぶつかってきた。恐ろしくて、私は大声で泣いた。

私たち三人は、軍隊内の一室で厳しく詰問された。どれくらい経ったか覚えがないが、父が迎えに来てくれた。このときのホーさんの、ほっとした顔が忘れられない。その後、父が仲人をしてホーさんと彼女は結婚した。

太平洋戦争が始まり、食堂の中も陰悪な空気になるときがあった。「千人針なんか腹に巻いても、鉄砲でズドンとやられれば何にもならない」と、中国人が言うこともあった。父は「頼むから、俺の前で言わなくてくれ。憲兵に聞かれたら大変だ。連れて行かれるのを見たかない！」と言った。客の一人が、戦場での死体を写した写真を持っていた。父は「子供の前では見せてくれるな」と怒っていた。

相変わらず両親は忙しくて、私が虫歯で治療に行くときもマーチヨ(馬車)に乗って一人で行く。御者の中国人の小父さんが、あまり綺麗とは言えない毛布でくるんでくれて「好(はお)と言う。私は「天好(てんはお)」と答える。その中国人の小父さんが、日本兵たちに殴られていた。鼻血が飛び散って、雪の道路がみるみる赤くなっていく。日

本兵は馬車に乗っても金を払わないのである。綿入れの支那服の袖でグイッと鼻血を拭うと、「日本鬼子(チーパータークウ)」と叫び、馬車に飛び乗りピシッと鞭が鳴り、走り去った。

次の日、私は歯医者の日であった。馬車の小父さんは時間どおりに来た。紫色に腫れた顔は、毛皮の防寒帽で隠されていた。母親は治療後も乗せて来てくれと頼み、私には「怖がらなくていい、乗せてもらいなさい」と言った。私は恐ろしかった。病院に着いても立ち上がれなかった。「来々(ライライ)」と昨日の鼻血の付いた綿入れの腕が伸びたとき、自然に抱かれて降りた。帰りの氷点下の馬車の中で仰ぎ見た青い夜空、飛び去る星、「御免ね」と思う悲しい思い、忘れられない。

学校が終わると、食堂へ遊びに行く。その時間が一番暇なときである。十二歳ぐらいのお手伝いの少年がいた。私が入って行くと、その子が「チーパータークウ(日本鬼子)」と言ってはアカンベーをするのである。私は「日本鬼子」だけは分かる。だから立ちすくむ。ホーさんが急いでチエン餅を焼いて、生ネギ、ニンニク、味噌をのせ、手早く

巻いたのを半分は切って二人に持たせるのだ。私たちは、黒光りした木の椅子に座って何となく仲良しになり、それを食べた。私は中国人と日本人のきしみを、子供心にいつも感じていた。

学校での四年生、五年生の授業というとき、教練か、なぎなたか、必勝祈願の神社詣り、広い野原の開墾であった。教練は足が揃っていないとどなられ、なぎなたは細くて軽いのを持たないと動作が遅れるので叱られる。算数や国語の授業はあったのだろうか。覚えが無い。見渡す限り耕した畑で収穫したジャガイモは、大きなトラックに山盛りになった。あのジャガイモはどこに行ってしまったのか、だれが食べたのか分からない。

私は一人っ子だったために、「お前の家は国賊」と言われた。いつも、びくびくと恐れていた。動物園の動物たちもいつの間にか姿を消して、がらんとしていた。そこにヒマを植えた。採れた実から零戦の燃料を作るのだと言われた。草取りは暑くて暑くて、高い塀の上に登ってさぼることを覚えた。そこは樹木が茂り、外からは見えにくかった。

そこで友だちとは、「本当にヒマの実がガソリンの代わ

りになるのだろうか」とか、「将来は看護婦になって傷病兵の世話をしなくてはいけないのだろうか」とか、「こんなに何も無くなって戦争に勝てるのだろうか」とか、「神風が吹くなら吹くで早く吹いてもらわんと困る」とか、およそ先生が聞いたら、「ビンタの一つや二つでは済まないことを話していた。

六年生の新学期は、ライラックの新葉を摘むことから始まった。戦地の兵隊さんの胃の薬にすること、どこかの公園のライラックの木も丸坊主になり、毎年ふくいくとした香りと、薄紫で美しく街中を彩る大好きな花の咲く季節も花は咲かず、味気なく終わってしまった。そのころから、街の様子が変わってきた。中国人の人々が集まって話をしていくときに日本人が通ると、じろっと見て馬鹿にしたように笑うのである。あちらの角にも、こちらの道にも集まっていた。私たちは恐ろしくて、集団で行動するようになった。

昭和二十年の五月ごろになると、かなり年配の人にも召集令状がきた。友だちの何人かは、父親を兵隊にとられていた。召集兵は竹筒の水筒しか与えられず、指定さ

れた集合地の部隊に行ったら、だれもいなかったといううな状態もあった。とは言っても、赤紙が来れば行かなければならない。辛うじて残っている父の所には、その人たちの家族が託された。赤ちゃんのいる家庭、八月には出産予定の奥さんなど、いろいろな事情を持った顔ぶれであった。

国道一号線は、毎日南に向かう関東軍の兵士を満載したトラックが数珠つなぎ、その間を大きな荷物を背負って歩く人たち、荷物を満載した荷車などを私は二階の窓から見ながら、ここが戦場になるのを予感した。たまりかねた私は、七月の半ばごろ父に「うちはなぜ逃げないの？」と聞いた。父は「もう新京駅の列車は、軍人かその家族しか乗せない。そして次に乗れるのは満鉄の偉い人とその家族。普通の人の乗る車両はない。歩いて逃げたって、すぐに食べ物も水も無くなる。中国人の人が恵んでくれると思うか？ それよりここにいれば骨ぐらいいは捨ててくれるだろう。俺は中国の人たちに悪いことはしとらん。それでも日本兵がしてきたことを許せん。だから、今お前らを殺すと言われれば仕方ない。覚悟はしとかにやいかんぞ！」私はまったくそのとおりだと思った。八月十三日朝、陣痛が

始まった奥さんを、父はリヤカーに乗せて病院へ向かったが、日本人の医者、助産婦は一人としていなかった。結局、中国人の医師にお願いしたが、結果は死産であった。父は夕方家に戻ると、蜜柑箱の板を使って小さな棺桶を作った。

翌朝早く病院に戻ると、ベッドには死産した赤ちゃんだけが残されていた。立ち会った医師にどうしたのか聞くと、「明け方、暗いうちに日本軍のトラックに飛び乗って、止める間もなく行ってしまった」ということであった。

父はやむなく残された赤ん坊の遺体を火葬にし、一握りもない遺骨を昨夜作った蓋付きの棺桶に入れた。(その後、この棺桶はリュックサックの一番底に入れて持ち帰り、NHKの「尋ね人」で放送をお願いしたが、名乗り出る人はいなかった。)そのとき、人間は追いつめられるとすごいことができると思った。

八月十五日正午の重大放送というのは、天皇陛下の終戦を告げる放送であった。スピーカーから流れてくる甲高い特別の抑揚をつけた天皇陛下の声が、私には何とも異様に聞こえ、これが現人神の声なのか、日本を動かして

いた神様の声なのかと思った。一緒に聞いていた父は、放送の内容が分からない所があって、同僚に確かめに行った。「やはり日本は負けたのだ」と言った。想像していたことが現実のことになった。

昼食を急いで食べている最中に、小銃の撃ち合う音が聞こえてきた。喚声も近く大きく聞こえるようになってきた。隣組からは伝令がきて、「日本人は康徳会館に集結せよ」と言った。

裏通りを二時間ほど走り、関東軍司令部近くの康徳会館に着いた。そこは日本人であふれていた。百人以上いたと思うが、みんなは声をひそめひっそりしていた。午後四時ころになって気が付くと、父がいない。母は心配ないと言いが、目は絶えず父を探していた。広い部屋に入った残照が消えるころ、突然握り飯が配られた。父とホーさんが握って運んでくれた握り飯であった。一人に一個の割当て、暗がりの中で食べた。食堂の米はこれでおしまいだと言う。私も白米のご飯はこれが最後かと思ひながら食べた。みんなが噛みしめる、かすかな音だけが静かな部屋の中に聞こえ、不思議な光景であった。

十時過ぎ、もう少し安全な所へ移動することになり、列を組んで出発。母の背負うリュックサックだけを見て歩く。歩いて歩いてもう駄目だと思つたころ、大きな建物の中に入った。法院といつて、国会議事堂にあたる所だった。広い部屋だった。どこでもいい、ひっくり返つた。でも眠れない。だれかが「二時だぞー」と言っている。

朝、トイレに行つて驚いた。ふん尿で足の踏み場もない。水洗トイレが断水になったときの無様な有様だった。飲み水は、水道管の破れから漏れているのを水筒に詰めた。乾パン一人十個を配られて、その日の夜までこれだけで凌いだ。

幾日過ぎたのだろうか。ある夜突然に、ここはソ連兵の兵舎になるらしいとの情報が入り、必死で逃げ出した。空き家が一軒あつたが、泥靴で歩き回つたような踏み跡、ゴミだらけの室内、使える物は何も無い。鍵は壊され、不用心な家だった。しかし、それでも私は喜んだ。吉川英治の「鳴門秘帖」が全巻転がっていた。毎日、乾パンをかじりながら読みふけた。武士の生活とか、恋とか、剣術とか、面白くて一日中読んでいた。両親から用事を言いつかるこ

ともなく、ゴミを隅に寄せて寝転がって読みふけり、次はどうなるのかとわくわくした。

九月になると、急に寒くなつた。着替えや暖かい衣類がほしくなり、食堂の家に戻る事になった。ソ連兵のマンドリン(自動小銃)に狙われない早朝に、荒れたこの家をおとした。

八月十五日に出た家は中国の人々に守られて、すべて無事であつた。ひっそりと、しかし心の落ち着く生活を始めた。隣の謝さんに燃料をもらつて風呂を沸かした。謝さんが「何か起きたら自分の家に逃げて来い!」と言つてくれた。

それから三日ほど経つたある日、日本兵に見付かつてしまった。「日本人は隣町に集結して、引揚げまでそこで生活することになっている。ここにいると、帰る日時の知らせが届かないかもしれない」と言う。仕方なく、また隣町の空き家を探して引越した。必要な物だけリヤカーで運び、残つた物は謝さんに処分してもらふことにした。

新しい家は、前の家と同様に鍵が壊されていた。不安なので、父が再び鍵を付け直した。ある日突然に、前に住ん

でいたという男の人が来た。「ここから引き揚げて奉天に行くので、荷物を取りに来た」と言つて上がり込んで来た。「俺の荷物が無い。売つて金にしただろう」と言う。敗戦後、町中全部が暴徒などに襲撃され、日本人の荷物、財産、食物、住家、ありとあらゆる物は何も無くなってしまったことを知つていての、言い掛かりである。この人は、日本に引き揚げてからも我が家を訪ねて来て、同様なことを言つてきた。

ここで生きていくために、父はホーさんに頼んで大豆とニガリを買つて来てもらい、豆腐屋を始めることにした。五右衛門風呂で豆乳を沸かすために、丁寧に洗つた大豆を水に浸して、翌朝三時から石臼を手回して大豆をひいた。それは母と私の仕事であつた。大豆の絞り汁を風呂で沸かすと、豆乳ができる。この一杯が、ものすごくうまかつた。ニガリを入れ、父の手作りの木箱に布を敷いて流す。六時には、父が一斗缶二個を、天秤棒に振り分けて売りに行つた。冬の朝は、豆腐の一斗缶から湯気が立っていて、すぐに売り切れた。ペスト、コレラ、赤痢など伝染病が流行つていたので、熱を通して作つた豆腐は人気があつた。

特に、哈爾濱を通つて避難して来た人たちには伝染病患者が多かつた。特に赤ちゃんがいる家族や病人などは、父が売りに来るのを待つていて買つてくれた。父は買う人の事情によつてはただで与えて来ることもあつたらしく、儲けは少なかつた。

そのうちに、母が病気になつてしまった。咳と熱の出る日が幾日も続いた。胸がゼイゼイと音がする。肺炎か肋膜炎ではないかと、カラシの湿布をした。朝と晩、新聞紙にカラシを湯で溶いた物を塗り、胸と背中にかけて、毎日私が係となつて必死でやつた。そのころ、校長先生がソ連軍司令官の許可を得て、塾をやつてくれた。私は勉強したくて、仕事の手抜きをしないことを条件に行かせてもらつていた。朝、母の湿布が終わると、食事をして塾に向かつた。国語は漢詩、数学は方程式、外国語はロシア語、社会は孫文の三民主義だつた。塾は昼まで、家に帰ると食事もそこそこに、売れ残つた豆腐を一センチメートルぐらいに切り、斜めに立て掛けた板に並べた。水気が無くなる四時ごろに、油で揚げる。熱々の油揚げができて、父が売りに行つた。



そのころは忙しかったが、生き生きしていたと思う。母の病も大事に至らずに治り始めた三月下旬、塾では小学校として卒業式があり、半紙にガリ版で刷った、ガキ大の卒業証書をもたらした。校長先生の印も押してあり、大切にしていた。これが引揚げ後に役立つ、女学校の編入試験を受けることができた。

ピーナツ売りもやった。机の引き出しに紐を付け、首から下げるようにした。自分で作った新聞紙の袋を並べ、それにコップ半分ほどのピーナツを入れ、売り歩いた。友だちも、芋飴とかスイカやヒマワリの種を煎ったのなど売っていた。物陰では、日本人の母親が赤ちゃんを、パン二個と交換していた。まさかと思ったが次の日には、天秤棒の振り分け籠の中に、赤ちゃんが二人ずつ入れられ、値段がついていた。

国府軍と八路軍の戦が幾度もあった。風呂場が安全なと言われて、隠れて銃撃戦が終わるのを待ったこともあった。赤い旗と、青天白日の青い旗の二種の旗を作った。戦が終わったとき、赤か青のどっちが勝ったか確かめて、振る旗を間違わないよう手にして道に立った。

三月の戦のとき、明け方にひどくドアをノックされた。危険を感じて皆で押さえていたが、ドアが壊れそうになったので鍵を外した。入って来たのは、青い旗の将校らしい長靴を履いた三人だった。部屋に入るなり、軍服を脱いで支那服に着替え、支那靴を履いた。それこそ、あつという間に飛び出して行った。父が「こんな物はいらない」と、置き去りにした長靴を道に投げ捨てた。銃声も治まった七時ごろ、今度はドアの外から「オハヨ！ オハヨ！」と声がした。開けてみると、銃を持った兵士が四人ほどいて、「ショクジ、サセテクダサイ」と言った。私は油揚げを作り、父はご飯をよそって汁を温めた。軍服ではない綿入れの支那服、しかし帽子に赤い星が着いている。赤い旗の方だと、とっさに思った。兵士は食へ終わると、「ウマカタ」と片言の日本語で言って四十円渡された。びっくりして声が出なかった。今までソ連兵は銃を突き付けて取って行くばかり。国府軍はソ連兵ほどひどくはなかったが、ただ取るばかり。今度のことがあってからは、出迎への赤い旗は気持ちを込めて振ったものだった。

捕虜は、銃を突き付けられながら両手を上げて、列の

先頭に並ばせられた。捕虜の列は長かった。その後ろに八路軍の長い列が続いていた。服装はバラバラだが、足並みは揃っていた。八路軍が入って来るまで街中にゴロゴロと転がされたままの死体は、いつの間にか綺麗に片付けられていた。内戦も、もう終わりだな、と思った。

次の日、ぼんやりと夕日を見ていた。美しかった。隣に来て座った人がいた。不良だから話をするなど言われているお兄さんで、いつも一人でいる人だった。「お前、日本に帰りたいか？」と聞いてきた。私は「帰りたい、こんな所はもういやだ！」と言ったら、「俺は明日八路軍に入れてもらう。おやじもおふくろも死んだ。日本に帰ったってしょうがない。八路軍と一緒に頑張る。お前たちが帰れるように頼んでやるからな。死なんようにしとれよ」だが、その後再びこのお兄さんの姿を見ることはなかった。

私には年の離れたいとこがいた。新京の飛行場で整備士をしていたが、ソ連軍にも連れて行かれず、敗戦後もモロちゃんという赤ん坊と奥さんと三人で細々と暮らしていた。人づてに、赤ちゃんと奥さんの病気がひどいと聞いて、父が一日掛けて様子を見に行っただが、とき既に遅く、彼

は奥さんと赤ん坊の遺体のそばでオーバーを羽織り、うづくまっぺ口もきけない状態だった。死因はコレラだったという。床には、ふん尿に汚れた衣類が散らばり、壁までもが汚れ、伝染病故にどうしようかと思っていたそうである。布団・衣類は全部外へ出し火を付け、遺体は毛布に包み土に埋め、いここには住む所を替えさせた。石鹸で体を洗い、清潔なものに着替えさせ、食事もさせて帰って来た。父も着ていたものも燃やし、自分も石鹸で洗いまくっていた。

この冬を越せずに死んだ人は、五万人以上だったという。地面が凍ると穴が掘れないので、十月に五万の穴が用意された。見渡す限りの穴は何のためかと聞いたとき、冬中遺体を山積みにはしておけないと言われた。三月には死者が増え、掘った穴が足りないほどであったという。奉天では遺体が山積みになり、古い遺体は骸骨化し、新しいものにはウジがわき、すごい臭いだったそうである。

昭和二十一年四月、引揚げ開始となり、私たちは七月二十二日、新京駅ではなく南嶺の停車場に集まった。ものすごい人で迷い子がでるくらいで、年寄りには倒れる、

家族とはぐれるなど、大混乱であった。そんな中、石炭用の屋根の無い列車に乗り込んだ。座ったら身動きができなかった。線路の両脇に、溝が掘ってあった。引揚者が途中で死んだら投げ入れるためであった。雨が降っても傘はさせず、濡れっぱなしで、木一本生えていない広野に、軍馬の生き残りか、馬が三頭身を寄せ合っていたのを覚えている。

列車は、昼も夜もなく急に停車して動かなくなってしまう。すると、後ろの車両から賽銭袋が回ってきて、皆何がかしの金を入れて前の車両へ送っていく。それが先頭の機関車に着いたころ、列車は動き出した。こんなことが幾度も繰り返されながら進んでいった。

昼間に列車が停まると、中国人が湯を売りに来た。マントウもある。ギョウザもある。金の無い父は、茹でたジャガイモを買った。これから先、どれほど金が要るか分からないからと。母がドロップの缶から砂糖をくれ、ジャガイモが至上の味になり、毎日でも飽きることがなかった。

一番困ったのは用便で、特に女性には遮るものの無い草原では必死の思いであった。列車が動き出しそうものなら、

とにかく飛び乗らねばならなかった。

奉天を過ぎたあたりで、だれかが「ここは柳条湖だ！」と叫んだ。皆一斉に首を伸ばしたが、私は何のことか分からなかった。後に満州事変の発端となった場所であることを知った。

旧日本軍の兵舎で、一旦列車を下ろされた。DDTの散布と検便が待っていた。赤痢菌の見付かったグループは、全員が無菌になるまで滞在しなくてはならなかった。ほとんどのグループは、滞在組になった。馬小屋の馬一頭分の場所に家族で寝泊まりしたが、馬糞の臭いで頭が痛くなる。ことに雨振りの日は臭いが強烈だったから、みんな口で息をした。

母が、ここを脱出する策を考えていた。毎日体を石鹼で洗うこと、用便の後も石鹼で手を洗うこと、高粱の粥もカンパンも、配られた自分の分はちゃんと食べて力をつけること。幸いに大きな井戸があり、体を洗ったお陰か

しらみ  
虱もわかず、皮膚病も治った。

八月二十二日、葫蘆島の港から船に乗り、日本へ向か

うことになった。戦争での生き残り貨物船は速度が遅く、一週間以上かかって佐世保に着いた。停泊中、あまりの暑さに船から飛び込み泳いだ男性がいて、検便が陽性だったので、上陸は中止になってしまった。

やっこの思いで収容所に入ったのに、またも検便の結果が悪く長期滞在となり、九月二十二日によく故郷に向かつて出発することができた。なぜか、いつも月の二十二日だった。

後で知ったことだが、佐世保収容所では昭和二十三年六月までに受入者は百三十九万人、内孤児七百五人、死者は三千九十三人にものぼり、二カ所の火葬所で、多いときには一日七十人から八十人を火葬にしたと聞いた。また婦人相談所では、主にソ連兵に強姦され、妊娠した女性の胎児を下ろす相談を受け、処置もしたという。

博多では、百三十九万二千四百二十九人受け入れ、コレラ患者二百二十八人、死者六十七人という記録がある。コレラ港という不名誉な港に指定された。以上は引揚援護局の記録による。各港では、伝染病をくい止めるのに一生懸命だったのである。

佐世保を離れるときは、赤トンボがいっぱい飛んで、船が行く入江は水が青く澄み、魚影が見えた。なんて日本は美しいのだろうと思った。小倉を通り本州に入れば、黄色く実った稲穂、あぜ道の彼岸花、鎮守の森、鳥居も見えた。

短波放送で聞いていた、新型爆弾投下の広島駅に停車した。新しい電柱が見える。黒く焼けて、崩れかけたビルが点々とあり、道らしいものが瓦礫の中に続いていた。浴衣を着た女の子が毬まりをついていた。ここで暮らしている子がいるのだと思った。

三日後の夜中に、父母の実家のある愛知県岡崎に着いた。暗い道を歩く。母が「この辺に不動さんの湧き水があった」と言った。湧き水は健在であった。何杯もお代わりして飲んだ。満州の生水は絶対飲まなかった。必ず沸かして飲んだ。そうでないと下痢するからだ。その近くの親戚に寄った。残り物だが出されたうどんに、ナスの汁がかけてあった。こんなおいしいものはないと思った。

母の実家では、ニンジンの入った味噌飯が待っていた。おい

しくて、腹は底無し感じでいくらでも入った。栄養失調の人が一度にたくさん食べると死ぬからと、食欲を抑えるのに苦労した。その後二カ月以上もお風呂に入っていないので、湯船に入るのを遠慮したが、臭くて汚いなあと自分でも思った。

次の日、大人たちは今後のことを相談していた。父が預けていた大工道具は、全部無事であった。実家のおじいさんに御礼を言い、「明日からでも働くぞ」と言った。家を借り、父は仕事に出掛け、私は女学校に編入試験を受けに行った。数学は戦後、塾で習っていたので、九十点は取れたかな。国語も、「鳴門秘帖」のお陰で漢字も書けたと思った。合格通知をもらったが、父は「うん」とは言わなかった。佐世保でもらった生活費は三千円、六百円の学費は無理だというのが父の腹の中であった。私は、負けた日から考えていたことを、思い切って父に言った。「負けると分かっている戦争をなぜしたのか」「大本営発表がインチキだったのが、なぜ見抜けなかったのか」「ソ連が参戦することを知っていて、なぜ関東東軍は日本人を見捨てて自分たちだけ処置をしたのか」など、いろいろ心の中でもややもやしていたこ

とを一気に吐き出した。父に答えられるわけはなかった。父は、「学校に行って先生に聞け」と言った。私はそれを聞いて「足りない学費は内職をして補うこと、絶対怠けないこと」の二点を父に誓って、入学することを許してもらった。

女学校での二日目が中間テスト。英語はABCも書けないのに「オーブンザドアー」だった。歴史は神武天皇しか知らないのにチグリス・ユーフラテス川、数学だけが九十七点、白紙の答案用紙三枚を持ったまま、ぼんやりしていた。隣の席の子が私の顔を見ていた。私は「何をどうしたらいいのか、分からん」と言った。その子は一言、「ノート貸したげる」と言った。

毎日ノートを写した。一学期の分から二学期へ、疲れると線香花火の内職。二本振って二十五円、二十四円やれば六百円。母の弟である叔父さんが「帳面買え」と百円くれた。有り難かった。盆と正月、お祭りには小父さんを待っていた。さもし根性で。

二学期の終わりに何とかが「並」になった。しかし夏休みの林間学校とか、遠足とか、金のかかる行事は休んだ。

母がしている軍手の内職を増やして、病気にさせるわけにはいかなかった。

冬の初め、初めて父に新築日本家屋一戸建ての仕事がきた。毎日、檜の香りをさせて帰って来る父が好きだった。

満州での十年のフランクをものともせず、一カ所の間違ひもなく棟上げができたとき、私は誇らしかった。

若いときに覚えた技は錆び付かないと思った。仕事も増え職人も三人抱え、見習いの少年もいるようになった。

父の実家ではもめていた。男の兄弟四人、遺産相続のことらしかった。「あいつらは満州で死んでしまえば良かった」と言われた。父は相続を放棄した。そのときは、兄弟でも随分ひどいことを言うと思ったが、国が敗戦時に私たちを捨てていたことを思い出した。

戦争は人と人との殺し合いで、気がいにならねば人を殺せない。お互い殺された方は怨みが残る。そうして戦争は続くのである。私は女学校から高校へ進んだが、大学には行かずに就職した。結婚もして、三人の子供も授かった。

ある日、バスの中で高校時代の日本史の先生に出会った。

私は「先生は、私が一番知りたかった近・現代史を教えてくださいませんか。大学受験のために必要な明治維新までの授業でした。就職する私には、受験用の歴史ではなく近・現代史で本当のことを教えてほしいかった」と言った。先生は「すまんだなあ」と笑っていた。

満州で、わら半紙にガリ版刷りの卒業証書をもたらった卒業式で、校長先生は言った。「君たちは、ソ連兵は恐ろしいと思っているだろう。おどかして物は持つて行くし、女の人に乱暴するし、男はシベリアに連れて行く。日本にいるアメリカ兵はいいなあと思ってるだろう。ガムやチョコレートをくれるから。しかしなあ、どっちが良いか、何十年も経ってからでないかと分かんのだ。君たちは長生きして見極めてほしい。歴史というのはそういうものだ」その先生も今は故人となられた。

私はこの年になって、校長先生の言われた言葉をつくづく思い出し、そう噛み砕いている。



